

困窮する学生たちの現在をもたらす 新自由主義下の教育のありよう（上）

——これまでの論点整理と新たな課題——

池 野 重 男

1. はじめに
2. 困窮する学生たちの現在をもたらす新自由主義
3. コピペの問題
4. 共感のレポート
5. 反発・反論のレポート

以上，本号掲載

以下，次号掲載予定

6. ブラックバイトの問題
7. ケータイの問題
8. 興味・関心の問題
9. 次なる課題

1. は じ め に

本稿の表題は、2014年度と2015年度の本学特別研究費の申請に際して私が付けたものであり、本稿は「特別研究費成果報告書（2014年度受給分）」として提出したものに私が大幅に加筆したものである。ここにそれを発表するのは、ひとつには「特別研究費成果報告書（2014年度受給分）」には書き切れなかったという紙幅制約に関連してのことであるが、同報告書を書いているうちに私のなかでいったい何が問題であるのかが徐々に整理できてきたので、いっそのこと、もっと十分に書き上げることでこれまでの論点の整理と、これからの課題についての展望を試みてみたい、と考えたからである。

そして、もうひとつの理由は——こちらが後から挙げたからといってその重要性が劣るわけではない——、以下に随時示すところであるが、私は講義のなかで学生たちから数多くのレポートを受け取っており、せっかくのそれらを十分に彼ら・彼女らにコメントを付して返すことができていない——講義が終わってから、あるいは、講義でビデオやDVDなどの映像を流している間に、といった感じで個別に呼び出してコメントするが、時間の制約もあって十分なものではないし、その時に欠席している学生もいたりして、すべてのレポートについてコメントできない——ので、この場でそれらのレポートの紹介と私のコ

メントを記すことで、その責務を果たしたいと考えたからである。だから、できるだけ多くのレポートを紹介することになる。

なお、レポートの紹介にあたって煩雑を避けるためにレポートの一部を省略することがある（その場合は引用中に……で示す）し、さらには、個人の特定がなされる虞があると思われる箇所については、私が適宜記号化したり省略したりしている。

2. 困窮する学生たちの現在をもたらす新自由主義

私は、「学生たちの現在・再論」（『大阪経大論集』第65巻第3号 2014年9月）と「興味・関心の問題と社会のありようの問題」（同 第4号 2014年11月）において、コピペに象徴される現在の学生たちの「効率的な」レポート作成の背後にあるものとして、学生たちの家族をも含む貧困——とりあえずは経済的なそれに限定したが、文化的なそれにも及ぶ——と、その貧困から脱出するための余儀ない長時間アルバイトの実態を示した。

ここで、私が展開した「困窮する学生たちの現在をもたらす新自由主義」という視点に関連して、「ブラック企業という言葉に触発されてブラックバイトと言い出したのは、いまの学生の状態では大学教育はできないと思ったからです」と言う、大内裕和氏（川村遼平・大内裕和・木村達也著／NPO 法人愛知かきつばたの会編『ブラック企業と奨学金問題——若者たちは、いま——』ゆいぽおと発行 KTC 中央出版発売 2014年11月）について、簡単ながら論評しておきたい。というのは、私の視点と共通するだけでなく、より深いものだと感じ入ったからである。たとえば、以下のような大内氏による現在の学生の把握・理解は、だから、私も認識を共有できる——

九〇年代くらいまでは、子どもの学費は親が何とかするとか、卒業までの責任は親が負うという家庭がほとんどでしたが、それがこれほど減ってきてしまっているなかで、学費が現在のままだと、学生たちはほんとうの意味での学生生活を送れないのです。私がブラック企業という言葉に触発されてブラックバイトと言い出したのは、いまの学生の状態では大学教育はできないと思ったからなのです。ゼミの合宿はできませんし、ゼミのコンパはできません。要するに、学生であることを尊重しない働かせ方をするのがブラックバイトですから、学生はいま、学生時代というものをほとんど過ごせないのです。たぶん日本の学生の九十パーセント以上は、学習時間よりアルバイトの時間のほうが長いと思います。……世界で唯一だと思います。……一九九〇年に大学生が一日に使えたお金は二千四百三十円です。現在は九百円台です。

p.66

大内氏は、こうした現状を打破しようと実践にも大いなる力を尽くされているだけに、その論理も根源的である。その点から私（たち）は多くを学びたい。たとえば、次のような方法と認識である——

大事なことは——たぶん学生たちはおかしいと思っても我慢して働いているのでしょ

うが——一つは、おかしいかおかしくないかを見極めること、もう一つは、見極めないまま放置するとどうなるかということです。なかには、バイトは学生時代だけのことから、我慢してしまえばいい、と考える人もいるかもしれませんが、ブラックというのは拡大していくからまずいわけです。朝日新聞の投書欄に六十歳代¹⁾ くらいの人が「薄給で結婚できない子どもたち」という投書をしていました。この人は四十四歳の息子と三十九歳の娘の給与明細を偶然見てしまったのです。いずれも正社員で、基本給が十万

-
- 1) 図書館でこの投書を調べてみると、大内氏の書いていた年齢とは違っていた——「無職 山口綾次（埼玉県 74）。現在の状況を象徴する典型とも思える投書なので、関連個所を引用しておく（朝日新聞2014年6月2日朝刊8ページ）——，

44歳の息子と39歳の娘がいます。2人とも未婚です。結婚できない一番の原因は、長時間労働と低賃金にあるのではないかと思います。

2人とも給料の話などしませんが、偶然、2人の給料明細を見てびっくりしました。共に民間会社の正社員ですが、基本給は10万円そこそこののです。東京に住む息子が生活できているのは、残業代が出るのと寮に入っているからです。会社では中堅で、海外へ販売にも行きます。それなのに安い給料なのです。

息子はこれまでに2度、結婚相談所に行きました。月給を話すと、渋い顔をされたそうです。「俺は結婚を諦めた」と息子は言います。朝早くから夜遅くまで働いて、やっと自分の生活を支えているのが現状です。それなのに、数万円のボーナスが出ると、私たち夫婦に小遣いをくれるのです。

娘の生活は、兄以上に大変なようです。弁当を作って生活費を切り詰めています。仕事の責任は重く、長時間労働なのに残業代は出ません。お金と時間、心のゆとりがあって結婚に結びつくと思いますが、娘には全てが欠けています。（後略）

「ブラックというのは拡大していくからまずい」という大内氏の危惧は、じつはこのようにすでに現実となって私たちの前に現われている。そして、グローバル化の今日では、それは日本だけではない。たとえば、寺西和男「景気上向く英国 不安定雇用の影 ゼロ時間契約」（『朝日新聞』2015年5月3日朝刊「ワールド経済」）によれば、「主要7カ国（G7）で昨年の経済成長率がトップだった英国」は「失業問題が深刻な欧州でも失業率は最低レベルの『勝ち組』だ。だが、好調そうに見えるその陰で、低待遇で収入も不安定な『非正規』雇用を続ける人が増えている。」その不安定雇用の典型として増加しているのが「ゼロ時間契約」だという。それは具体的には、「週あたりの労働時間が決まっておらず、雇用主の要請がある場合のみに働く。雇用主に仕事を提供する義務はないため、勤務が『ゼロ時間』になる可能性もある。雇用主は最低賃金を払うなどの義務があるが、正規雇用のような病欠手当や産休などは保障されにくいなど、労働者の権利が制限されることも多い。」これって、要するに雇用主にシフトを握られている日本の学生バイトそのものである。

なお、「ゼロ時間契約」については、佐々木賢「次世代への提言」（『現代思想』2015年4月号）は、「大卒初任給年五〇〇万円の職に就くのは三九倍の激戦で……初任給最低の公務員【約三八〇万円】を含め、ホワイトカラーの職に就ける若者が約四〇人に一人しかいない」というイギリスの就職状況を紹介しながら次のように言及している——「労働者の賃金は一〇年間に一〇パーセント減少し、ほとんどの人々が生活費以下の賃金しかもらっていない。平均生活費を時給換算すれば一四〇〇円、ロンドンでは一六〇〇円必要なのに、非正規労働者は一一〇〇円しか支払われず、年取二二二万円以下の人たちが六割いる。原因は『ゼロ時間契約』にある。待機して呼び出された時だけ就業し、労働時間が保障されない契約なのだ。」

円前後。……いよいよ東京で正社員の基本給十万円前後が登場し始めてる……このあいだ私の友人が——彼は南山大学の先生ですが——結婚式に行きました。花嫁さんは南山大学の卒業生で、驚いたのは、そこでの卒業生たちとの話です。南山大卒で一般職ですが、みんな終電で帰宅できないと言うのです。ステータスの高い大学を卒業する女性が一般職を狙うのは、総合職はきついから、結婚後とか出産後の家庭と職業の両立を考えてのことです。ところが、南山大卒一般職が終電に間に合わないまでの長時間労働を強いられているわけです。……労働条件の劣化はここまで進んでいるということです。つまり、たとえブラック企業を避けようとしても、労働条件の劣化が進めば、社会全体がブラック化してしまうということです。 pp. 81～82

個別の問題を社会の問題にまで引きつけていく方法と認識の確かさが、間違いなく、ここにはある。そして同時に、それを伝えようとする大内氏の学生への思いの強さにも、私(たち)は学ばなければならない。たとえば、奨学金問題について²⁾の大内氏の次のような講義風景である——

七割以上は第二種の奨学金です。毎月十万円借りれば、貸与総額が四百八十万円、貸与利率上限三・〇だと、返還総額は六百四十五万九千五百十円です。月賦返還額二万六千九百十円で、返還年数二十年。卒業後すぐに払い始めて、四十三歳で終了です。現在の貸与利率一・〇八でも、月賦返還額は二万二千三百五十一円……

こうした話をして、やはり反応しない学生がいます。……世の中いつも「いまだけ、金だけ、自分だけ」ですから、自分に関係ないことはなかなか考えません。私がこう話しても、「私、借りてないからいいや」みたいなことになります。でも、それでは困るわけです。講義を聴いてくれませんか。でも、次のひとと言を言えば、全員が真剣になります。「奨学金を借りているのは全体の学生の五十二・五パーセントです。君の結婚相手も借りているかもしれないよ」と言うと、教室の雰囲気が一気に変わります。寝て

2) 奨学金に関連する最近の文献として、鈴木祐輔「公的奨学金制度 力強い筆致で追及」(『週刊金曜日』2015年4月10日号「きんようぶんか 本」)が、栗原康『学生に賃金を』(新評論)を「題名が本書の内容を十分に表現していない」・「民間の給付型奨学金制度に言及しない」・「大学の無償化というもうひとつの大きな問題に対して、『学生は認識や知識などの共同財の消費者であるとともに、教員とともに知的活動を行っている。だから、対価を支払われるべきだ』という論法で挑むものの……あまりに理想主義的で無力である」と批判しながらも、それでも「日本の公的奨学金が教育の機会均等という理念から逸脱している現状に焦点を当て、追及する筆致は力強い」と、高く評価して次のように紹介している——「たとえば、日本学生支援機構の奨学金635万円が借金として残っている著者の体験や、諸外国との比較によって『貸与型の日本の公的奨学金は世界の常識からすれば学生ローン』であると指摘する点……/あるいは、第3章『<借金学生>製造工場』や第4章『悪意の大学』は、日本の公的奨学金制度が、教育の機会均等を補う手段として用いられてきた過程を明瞭に描いており、『何故、日本の公的奨学金は給付ではなく貸与なのか』という本書の中心的な問いに率直な答えを提示する。」

いる学生がいなくなります。

pp. 42～44

さらに、私が大内氏のパッションの強さを感じたのは、後に言及することになる自己責任論への強烈なる反論、というか、憤りを込めた反論である――、

奨学金を借りて返さないのは本人の自己責任だという議論は何重にも間違っていると思います。……借りるかどうか、本人は判断できません。授業料を払えるかどうかの判断は、日本の家庭の九割以上は親がしています。……ということは、借りること自体が親によって決められているわけです。それから、借りる額はどうですか。本人の責任ですか。違います。親の経済力で決まります。……つまり、この奨学金問題というのは本人の責任ではないのです。生まれによる差別を認めるかどうか、ということなのです。……どうして経済的に貧しい家に生まれたら、たくさんの借金を背負うのですか。この問題はまったく自己責任の問題なんかではないのです。……生まれの差であって、本人のせいではないのです。

pp. 64～65

それにしても、ほんとうに学生たちの間に「自己責任論」は広く深く浸透している。本稿でも後に示すことになる（第5節）が、とりあえず、ここでは、水無田気流・水月昭道・鈴木大介「『貧困』は見せ物なのか」（『AERA』2015年2月23日号）における討論が「自己責任論」の浸透を考えるに際して参考になるので、以下に示しておこう――、

水無田 同じような「かわいそう」な境遇にあっても、ちょこんと座って待っていておとなしく言うことを聞き、支援を受け入れる人たちは助けてあげるけど、そう見えない人たちは自分勝手にやっているから放っておくべきだ、という発想。同情の対極には、「かわいそうに見えない人」は排除してもやむなしという、やはり感情があるので、感情論ではダメなんです。

水月 『高学歴女子の貧困』にはバッシングもありました。博士課程に進学後、大学非常勤講師になった女性とフリーライターになった女性がそれぞれ自身の苦しみを素直につづったのですが、この2人に対する「自己責任だ」という意見です。声を上げたのが男性だったら、そこまでたたかれなかったかも。……

水月 「自己責任論」は、格差社会で自分より困難な状況にいる人をたたきたくなる心理で、「大変なのはあなただけじゃないから」という「心の悲鳴」でもありますよね。潔くシンプルなようでも、社会問題として考える機会そのものを捨てているから、自分のことも救えない。

水無田 当事者語りがバッシングされやすいのは、それが社会構造の問題ではなく、個人的な愚痴と捉えられてしまうから。……

水無田 自活するために当事者が動いたり、声をあげたりするほどに風当たりがひどくなるという矛盾がありますね。……

水無田 シングルマザーは死別なら同情されますが、離別だと勝手に出産して離婚したから自己責任だ、と糾弾されやすい³⁾。不利な状況で子どもが育つので、貧困の再生産につながる社会問題であるはずなのに。ヨーロッパでは少子化対策と同時に女性の権利と子どもの権利を擁護することに成功した国が多いのに、この民主的なやり方がなぜか日本では通用しない。

『『自己責任論』は、格差社会で自分より困難な状況にいる人をたたきたくなる心理で、『大変なのはあなただけじゃないから』という『心の悲鳴』でもある』とすれば、後に(第9節)紹介するように、「自己責任論」を信じる学生たちがかなりの数として私の前に

-
- 3) 『『貧困女子』の現実』を特集した『週刊金曜日』2015年5月22日号に掲載されている、『最貧困女子』著者・鈴木大介さんに聞く『『貧困=自己責任論』の危うさ』と、水無田気流「シングルマザーの貧困問題を再考する」から、それぞれ関連するところを紹介しておきたい――

「貧困=自己責任論」の根底にあるのは、まず、「あなたの選択がおろかだったのだ」というもの。その人の過去を責めるということで、シングルマザーへの批判によく使われます。「結婚したのも別れたのも自分が選んだことでしょ」という論ですね。

二つ目は「あなたが〇〇していた間に私は××していた」というもの。これはたとえば離婚して何も手に職ありません、という元専業主婦に対して、「あなたが専業主婦をしている間、私は大学院に行ってがんばって勉強していた」、中卒しか選択がない環境で育った子に、「あなたが10代で遊んでいたときに、私は学校で一生懸命勉強していた」と、自分に置き換えて攻撃するタイプ。

三つ目は「同じ状況でもがんばっている人はいる」。たとえば地方のマイルドヤンキー層などは、非常に低い所得水準で親兄弟や地域の友人らの縁をフル活用して支え合うことで、比較的幸福度の高い生き方をしている。すると、同じ所得層にありながら生活保護を受けないと生きていけないというような層に対して攻撃的になりますよね。実は貧困者の最大の攻撃者は低所得者だと、自分は考えています。

今年2月に起こった川崎市中1男子生徒殺害事件……被害者の母親であるシングルマザーに対する批判が寄せられたのも特徴的であった。その代表例は、林真理子「夜ふけのなわとび」(『週刊文春』3月19日号)に見られる意見……

母の愛の欠落がこの悲劇を招いたという指摘……心情的にはわからなくもない。だが、残念ながら林の「義憤」は、シングルマザーが抱えるさまざまな問題についての無知から発している部分が大いといえる。「母の愛」は、ときに「時間」と「お金」にあっけなく負けてしまうのである。この残酷な事実を検証してみたい。

現在、日本のシングルマザーは……8割以上が就労しているのに、5割以上が貧困状態にある。……母子世帯は一般世帯の4割以下の年収しかなく、働いて得ている収入は3割以下……全世帯類型の平均所得金額(537・2万円)以下の割合は、児童のいる世帯は41・5%だが、母子世帯では95・9%となる。

現在、日本ではひとり親世帯は決して数の上では多数派ではないが、「特殊」で「例外的」な家族のかたちではない。「子どものいる世帯」は約1180万世帯だが、母子世帯数は推計約123万8000世帯。父子世帯は約22万3000世帯と推計されるため、子どものいる世帯の8世帯に1世帯はひとり親世帯であり、学校で1クラスに数名は必ずいる数値となる。

いるのだが、そのこと自体がじつはすでに大問題であるということであるし、また同時に、それを解決するためのいくつかの「民主的なやり方がなぜ日本では通用しない」ことも、あらためて考えなければならない論点のひとつであろう。

3. コピペの問題

さて、苛酷なアルバイト生活に疲れて余儀ないものとしての「効率的な」レポート作成とは、直截に言えば、なんの問題意識もなしに与えられた課題のキーワードをいくつかインターネットに打ち込み、それでたまたま得られた情報を理解することなしにそのまま写す、といってもかつてのようにはいちいち手書きで書き写すのではなく——だとすれば少しは手を通じて頭に入ることにもなるのだが——、コンピュータ機能のコピペを使うのである。だから、どれだけ多量であってもいとも容易に量産可能なのである。こうした安易なインターネット利用への私の批判に対しては、学生からはもちろん共感があった——

……論文を読んで、学業に専念しなければという気持はありながらも、できない学生の気持にとても共感した。家庭の事情とコピペ問題はより一層深くなると感じた。……

まず、コピペ問題については、先生の言う通りです。図書館でものを調べるよりネットでの調べは効率的である。しかし、ネットでの調べはその場で終わり。もっと広く深くなる点は勉強にならない。コピペ問題になる原因としては、技術の発展は一つですが、もっと主要な原因は、現在の人びとは図書館で一日過ごす暇がないと思う。社会人は毎日の仕事で精一杯。学生たちも学校とアルバイトで図書館に行く余裕がない。

私はほとんど図書館を利用しない。本を読むのは苦手。……レポートにたくさん時間や手間がかかって、けっしてほしい答が見つからない。こんなとき、やはりパソコンとスマホを拒否することができない。……

私は、分からないことがあればすぐにインターネットで検索する。理由は……便利で簡単だからだ。講義の課題やレポートを書く際もインターネットからヒントを得ることも少なくはない。確かに、文献をそのままコピーし貼り付ける“コピペ”は良くないことではあるが、インターネット検索を使用し知識を得ることは悪いことではないと私は考える。しかし……インターネットと図書館での調べものの「本質的」な違いについては納得できる部分が多くあった。調べたいことや得たい知識に到達するまでの経緯で知識が深められることは、すぐに検索できるインターネットではないと言える。便利だからといってインターネットばかり使うのは、検索することで知識を増やしているように見えて、実は（図書館などでの調べものに比べると）損をしているのかもしれない。

……コピペ問題……学生を簡単に咎められないのは、そのような行動に学生を駆り立てているのは社会であるからだ。学生の現状というのは、大学に通いながらアルバイトを

している者がほとんどである。低賃金、長時間労働で生活を蝕んでいるが、経済的に辞めることができないというのが現実である。この先、経済を支える学生たちがこんな状況では明るい未来が見えてこないのは、自分だけではないと思う。

しかし、どちらかというところ、学生たちからはコピペ状況への諦めと、私へのより強い反論・反発が数多くあった――

確かに大学生はアルバイト中心で時間がほとんどなくレポートはコピペで済ましてしまう人が多いのは確かだ。しかし、下宿している大学生はアルバイトもしないと家賃すら払えなくなってしまう現状である。友人は親に仕送りもしてもらえずにいるのでアルバイトばかりしており、遊ぶ時間がないと嘆いている。

最近の若者は大学に進学して遊んでばかりというのが、自分の世代たちはどうなのだ？ と正直感じる。バブル世代の時は景気がよくてクラブで遊んだりし、就職活動の時は企業を簡単に選んだりできた時代を生きてきたのに、若者は甘えていると言う。自分もそれならそういう時代に生まれて育ちたかっただけかと思うのである。

学生がコピペで効率的にレポートを書いてしまい、確かに単位は取るものの力がついてこないという問題について、私は今までは大した問題ではないと思っていた。ただ文章を貼りつけるだけでなく、きちんと意味を理解して自分の言葉に書き換えてレポート作成をする人が多いため、「ネット検索と図書館の調べもののあいだに本質的な違いはないと考える」＝「かつて多くの人が図書館でしていたことを今ではネットでするようになっただけ」という文章と同じように考えていたからだ。図書館では調べものが広く深くなると書かれてはいるが、ネットでの調べもので効率的にレポートを作成し、浮いた時間で他の調べものに取り組むことができればいいのではないだろうか。

……ウィキペディアから引用するということは、私たち学生からすれば「よくあること」である。みんながそうしているし、それを注意されたこともなく、私だけでなくほとんどの人が普通のことだと認識していると思う。ただ、丸写しではなく、語尾を少し変えてみたりはする。図書館に行き本を探すということはほとんどない。ネットはどこだって見ることができるし、その画面を画像として簡単に保存できる。スマートフォンが普及しているこのネット社会では、仕方のないことではないだろうか。

日本の若者たちが本を読まないということもよく耳にするが、ネットが普及している現代ではもちろん本で調べるよりもネットで調べたほうが楽で早い。図書館で調べるより手軽であるのは確かである。これを好ましくないと考える人は、そもそもの話、論文作成でネット情報を利用するのを禁止すべきだ、と考える人なのかもしれない。また、ネットで調べても図書館で調べても、調べるということに本質的な違いはない、と考え

る人もいるであろう。

この現状について、考え方は人それぞれであると思うが、ネットで調べるのも本で調べるのも論文の作成に至る過程や努力値にそれぞれ違いがあるだけであり、私自身は悪いことだとは思わない。結果としてこの先の自分に返ってくるものが、使える力なのかどうか、ということだけであると私は思う。

私は、レポートを書く際にはよくインターネットを使う。特に何か用語の意味などを調べたり使ったりする時にはウィキペディアを活用することが多い。非常に効率的である。図書館などを利用し自分で調べるのは非効率的であるが、そのかかった手間や時間、そこまで触れてきた文書などにより学生の力をつくであろう。だが、今の時代にパソコンやインターネットは使えて当たり前で、使えないと就職活動でも遅れをとるぐらいである。時間を有効的に使うためには最も有効な手段だろう。時間を有効的に使うというのも今の学生の生活状況にある。学生によって様々だが、ほとんどの学生はアルバイトをしている。学費を払うためや生活費のためや自由に使うお金のためと用途は様々だが、アルバイトに時間を費やしている。中にはアルバイトをしていかないと生活できない学生も存在し、本業の学業に時間を多くとれないようだ。他にも休みが取りづらい、いわゆるブラックバイトで時間に余裕がない場合もある。

ここからは私の勝手に思っていることだが、休めない、キツイ、時間がないとは言い訳に過ぎないだろう。私も親からの仕送りなしで生活をし、学費も高校卒業後アルバイトをし、3年次と4年次分は貯金をしてきた。私もそこに甘えて学業に力が入らなかったこともあるが、なんとかここまでやってきた。そういうようにキツイ、お金がない、時間がないばかり言い訳にするから、就職してもすぐ「私のやりたいことと違う」と言って辞めたりする。多少精神論的かもしれないが、正直なところホワイト企業など少ないとされている。それを踏まえた上でも、学生の時から学校もしっかり行って、アルバイトもして、課題もこなして、しっかり遊ぶという訓練をしておく必要があるだろう。

……図書館に行って本を借りてそれを参考にレポートを書く、ただそれは図書館に行かず本の代わりにインターネットを使用しレポートを書いていることと変わらないと自分は思う。図書館に行って何千、何万もあるその中から参考になる本を探すのは容易なことではない。手軽に検索でき分かりやすく載っているインターネットを使うのはなんら不思議なことではない。しかし、あくまでそのインターネットの内容を参考にするならいいが、コピペとなればまた話は変わってくる。

また、自分を含めてしっかりと内容のあるレポートを書く学力がないためにコピペに頼ってしまうことは少なくない。現代の社会においてインターネットや携帯電話などありとあらゆるところに情報を入手する手段があり、便利すぎる世の中に頼っていることも事実である。……コピペという問題を解決するにはまず自分がしっかりとした学力や能力を身につけることから始めなければならないと感じる。

上のレポート群にあるように、インターネットについて「ネットでの調べもので効率的にレポートを作成し、浮いた時間で他の調べものに取り組むことができればいいのではないだろうか」とか、「図書館に行って本を借りてそれを参考にレポートを書く、ただそれは図書館に行かず本の代わりにインターネットを使用しレポートを書いていることと変わらないと自分は思う。図書館に行って何千、何万もあるその中から参考になる本を探すのは容易なことではない。手軽に検索でき分かりやすく載っているインターネットを使うのはなんら不思議なことではない」、というような肯定的な理解が一般的である。技術の進歩に絡めて当然のように思われているのだが、じつは、決定的に・根本的に間違っている。これについて詳しくは、私の『電腦拒否宣言』（技術と人間 1998年）、あるいは、同書への批判（小倉利丸『「コンピュータ化社会」批判に向けて——池野高理『電腦拒否宣言』を読む』日本寄せ場学会『寄せ場』第12号 1999年5月）に答えた、私の書評（『大阪経大論集』第50巻第3号 1999年9月）を参照されたい。これに関連して、高橋源一郎・北原みのり「いま、『表現の自由』に何が起きているのか?」（『週刊朝日』2015年3月6日号）での高橋氏の次のような発言が興味深い——

僕は2009年からツイッターを始めたんですけど……最初のうちは表現の民主化だなと肯定的でした。それまでは、書くのは一部のエリートだけだった。でもツイッターは誰でも、書くこと、表現することに参加できる。王様をひきずり倒せ!と思ってね。……でも3・11の後、雰囲気が変わってしまった。それまで自由にツイッターは自由な空間で、呪詛を吐く空間はたとえば2ちゃんねるのようなものに閉じ込められていたんだけど、震災を機にダークなものが流れ込んできて、人々の中にあつたダークな何かをうまく刺激した。……

ツイッターはダークなものを解放するのにも適してる空間だということを見つけて、人を叩くことの喜びを覚えてしまった。……

3・11のような問題が起こったときに、僕たちが持っていた禍々^{まがまが}しい感情、つまり「あいつをやっつけなきゃだめだ」みたいな感情が蔓延していった⁴⁾……その場合、みんなが正義を掲げる。困るのはそれが正しいと信じてやっつけること。

4) 同じことを、イスラム過激派組織「イスラム国」に拘束された日本人二人が殺害された事件で報道される多くの「悼む声」に関連して、酒井順子「後藤さん、佳子様を巡り感情を解放させる日本人」（『中央公論』2015年4月号）が、「日本人が今、『無責任に感情を解放できる場』を強く求めている」として次のようにネット情況を指摘している——『泣ける』という触れ込みの本や映画はヒットするわけで、泣いてスッキリしたい人は実にたくさんいます。その手の人々は、自分の身の上で起こる不幸で泣きたいわけではなく、本や映画など、自分には火の粉がふりかからないものを見て泣きたいと思っている。／ネットの掲示板などにおいて、激しい他者攻撃、および『そんな指摘ができる自分はすごい』とアピールする書き込みが多いのも、『自分は傷つかずに、感情を解放したい』という欲求のせいでしょう。」

さて、コピペはもちろん、ツイッターは当たり前という若い学生たちは、高橋氏の発言をどう読むのだろうか？

ところで、高橋氏の、「ツイッターを始めた……最初のうちは表現の民主化だなど肯定的でした」という立場——私の前掲『電脳拒否宣言』で詳しく批判しているので参照されたい——は、じつは、このすぐ後に紹介する土井隆義氏の「本来」のネットという理解に通じるものであるが、こうした“素直な”理解を持つ学生からすれば、私が前掲「興味・関心の問題と社会のありようの問題」で指摘した論点のひとつ、「満足・幸せは他者への無関心ゆえの産物」というのは、当然のことながら、理解不可能となる。たとえば、次のようなレポートがある——

現在インターネットで他者の情報を簡単に知ることが出来る世の中で本当に他者に無関心でいることが出来るのだろうか、と考えてしまいました。他者に関して無関心ならツイッターのようなものは必要ないものだと考えられるからです。

もうひとつ。土井隆義『つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える』（岩波ブックレット 2014年）は、「相手の期待に沿い、気に入られるような人間でなければ、自分を愛してもらえないのではないか」という不安が強い現代において「人間関係を維持するためのツールとしてネットが介在するようになると、その不安はさらに駆りたてられやすくなります。互いに親密さを確認しあうための情報が、基本的には文字情報にかぎられているからです。……そのため、言葉の真意を読みとるのが難しく、『本当はどう思っているのだろうか？』といった不安が募っていき……どうしても言葉遣いが過激になってしまいがちです」（pp.14～15）とか、「近年、若年層の間では、『意識が高い』という言葉で、相手を賞賛する文脈においてではなく、空気が読めず当人だけが目立っていることを揶揄し、皮肉ってみせる蔑称として使うケースが増えています」（p.40 および p.61）、あるいは、「常時接続を超えて」（第4章のタイトル）という洞察など⁵⁾があり、

5) たとえば、「それぞれが個性を發揮して自由に振る舞えばよい。金子みすゞの詩にも『みんなちがって、みんないい』とあるではないか。そう考える大人たちも多いかもしれません。しかし、たとえば地域や学校をあげて『いじめ』撲滅運動なるものに取り組もうとしているとき、『そんなこと、やってられねえよ』などとうそぶく生徒を目の前にした大人たちは、いったいどんな態度をとってきたのでしょうか。……そういった子どもが目の前に現れると、そこに批判的な感情を抱き、排除の視線を向けてしまう大人もおおいのではないのでしょうか。……私たちは教育を行なうとき、知的なレベルでは『個の倫理』に訴えようとしますが、実践のレベルでは『場の倫理』を優先させてしまいがち……このような二重基準こそ、今日のいじめを背後で支えているものです。……新自由主義が浸透するなかで無縁化の不安に駆られた人びとが盛んに口にするようになった『絆の大切さ』という聞こえのよい言葉にも、あるいは東日本大震災後に復興のスローガンのように唱えられてきた『日本はひとつ』『つながろう日本』といった勇ましいかけ声にも、まったく同じ『場の倫理』を読み取れる……『個の倫理』を圧殺しかねないこれらの言葉に対して、いったいどれほどの日本人が違和感を表明しえてきたのでしょうか。」（pp.82～83）

私にはとても興味深く、そして、基本的な論理展開には賛成の立場なのだが、先のツイッター問題に絡めて次の指摘を読むと、いささか疑問に感じてしまう――

本来、ネットとは、多種多様な人びとが、時間と空間の制約を超えて、互いにつながることを容易にした開放的なシステムのはずです。しかし近年は、身近な仲間どうしが、時間と空間の制約を超えて、互いにつながりつづけることを容易にする閉鎖的なシステムとして使われる機会も増えています。ケータイなどのモバイル機器をネット接続の端末として用いる場合には、とりわけその傾向が強いです。 p.16

この土井隆義氏のネット理解は、「本来」のネットが「本来」ではない＝“間違っただけ”の使い方をされているというものであるが、そういう理解だと、営業戦略として「LINE」・「常時接続」・「既読表示」機能を充実させてネットがそのように使われることが儲かるように設定されてしまっている社会を批判できない。つまり、「本来」ではない使われ方がこの社会で必然に生まれるという認識が必要なのである。先のツイッターと同じように、である。これは技術をどう考えるかに関わる問題である。だから、同じことは、土井氏の「『既読表示』という便利な機能」という理解にも現れている――

スマホのコミュニケーション・アプリであるLINEには、「既読表示」という便利な機能があります。これは本来、東日本大震災時の経験から、受信者がいちいち返事を出さなくても、メッセージを読んだことが送信者にリアルタイムで確認できるようにと考案された機能です。この機能を活用することで、たとえば遠隔地に独居のお年寄りを抱えた家族では、スマホを見守りの道具として利用することもできるでしょう。お年寄りがわざわざ文字を打ち込まなくても、アプリの画面を開いてくれさえすれば、そのことが家族にわかるからです。

ところが子どもたちは、むしろ「既読表示」があるからこそ返事をすぐに送らないと相手に悪いと感じ、不安に駆られてしまうといいます。この機能のおかげで自分が読んだことは相手に分かるのだから、すぐに返事を出さなくてもよいだろうとは思えないのです。メッセージを読んでいるはずなのにすぐに返事が来ないと、発言が無視されたのではないかと不安になってしまう相手の心情がよく理解できるからです。なぜなら自分自身もそうだからです。ここには、この機能を開発した側の想定から見事なまでに転倒した心理が見受けられます。 pp.43～44

この理解だと、「既読表示」機能の開発者は「本来」は孤独な遠隔地のお年寄りのことを思って善意から考案したのに、いつのまにか「転倒した」（＝誤った）使い方がされてしまっている、ということになる。が、それはあまりに単純な、というか善意に溢れた誤解でしかない。技術開発者はそれがどのように利用され、そして、どのような結果をもたらすかまで考える責任、いわゆる社会的責任がなければならない。直截に言えば、「遠隔

地に独居のお年寄りを抱えた家族」という想定からしてそもそも怪しい。「遠隔地に独居のお年寄りを抱えた家族」が「独居のお年寄り」の面倒を見られないのは当たり前なのであり、近くの他人がその「独居のお年寄り」の面倒を見ることのない社会のありようこそ問題なのである。これについて私は、1995年の「あの震災時に必要だったのは、緊急に駆けつけることができる近隣の人たちのつながりあいだった」ことを、『保険社会』（技術と人間 増補版「改訂新版へのまえがき」）で書いている。

なお、後に（第7節）講義中の私と学生たちとのケータイをめぐる悲喜劇を紹介するが、フォトジャーナリズム月刊誌『DAYS JAPAN』（2015年1月号）は「特集：若者を蝕む依存症という危険」で「ネットゲームが破壊する人生」を衝撃的に報告している。ここでは、かつて携帯依存症であったという学生のレポートを紹介しておこう――

私がしでかした大失敗は、携帯電話の依存症にかかってしまったことである。私が携帯電話を持ち始めたのは小学5年生の頃だった。当時は周りで携帯電話を持っている友達が少なく、親以外に連絡をとる相手もいなかったため依存にかかることはなかった。しかし、高学年になるにつれ周りも持つようになり、一日のメールの頻度も徐々に増えていった。多い時で200～300件のやり取りをし、返信がきて10秒以内には返信をすることが当たり前になっていた。

これを機に私は常に携帯電話を肌身離さず持つようになった。トイレやお風呂場までにも持ち込んでメールボックスを開いて確認。この結果として、誰かとずっとコミュニケーションをとっていなければ不安で仕方ない、もっと自分のことを見て欲しい、構って欲しいという欲望に毎日苦しむようになっていく。また現在のSNSが発達していくにつれて、その欲望の苦しみは大きくなっていく。場所も時間も選ぶことなく誰とでも繋がれる環境が引き起こした携帯依存症が、私を心細くしていったのである。これが私の大失敗だ。

この学生と少し講義の後で話したのだが、「そんなにひどい依存症というのではなく、普通の学生と同じようなものです。一般ピープルってこんなものなのです⁶⁾。私もその一人だったというだけです。そして、いまはあそこまで依存していないし、大丈夫です」とのことであった。ちなみに、香月真理子「日本、536万人の『ギャンブル障害』者。ギャンブル機器、世界の64%が日本に――帚木芳蓬生さんに聞く」（『ビッグイシュー日本版』2015年4月15日号）によれば、日本にはギャンブル依存症――「ギャンブル障害が疑われ

6) こんなレポートもあった――「私も授業中携帯を使うことが多々ある。授業がつまらないというより携帯を触っていないと落ち着かないのである。スマホが普及していく中でそういった人が増えているのも事実であり、これからも増えていくと思います。そのせいもあり、学生が授業に集中せず、コピー問題が悪化していると思います。」あるいは、「講義中に携帯電話などを触り、ゲームや友達との雑談に時間を割いてしまうことは大きな損失になることを学生は自分でもわかっている。しかし、携帯電話などを講義中に触ってしまうというのが現実になっています。」など。

る人」——536万人、アルコール依存109万人、ネット依存421万人という。

このように「LINE」・「常時接続」・「既読表示」機能を充実させたケータイを持っているがゆえに学生たちは講義中もケータイをチェックしなければ落ち着かないのだから、じゃあ、講義開始とともに電源をオフにして使えないようにしておくこと、つまり、人間は弱いものだから、つい手を出してしまうのであるとすれば、最初からケータイを操作できない状況を設定することで弱い意志を守ればいいのだ、と私は言っている。いわゆる「プラグを抜く」戦略である。いまの社会があらゆる技術を儲け第一に運用している以上、どれだけ事前に避ける準備をしておくかが試される。「本来」の機能が「転倒」されるのは当たり前前の社会に私たちは生きているのだから。その点、先の土井氏も「モバイル機器の機能制限も、じつは対症療法にすぎない……ネット依存の本質的な問題は、むしろ日常の人間関係の築かれ方にこそある」(p.84)と指摘している。一見、「モバイル機器の機能制限……は対症療法にすぎない」と言う土井氏と私の講義中のケータイ・オフ作戦(＝モバイル機器の機能制限)とは対立するようだが、「本質的な問題」に到達するには「対症療法にすぎない」ところから始めるしかない、と考える私と同じなのである。

なお、コピペ問題に関連して私が安倍首相のそれを前稿で批判的に紹介したが、それについて次のような反論のレポートがあった——「安倍首相が平和式典の際、コピペを堂々と行なったとのことですが、政治家にとってはただの一業務なのだと思います。よって出来れば簡単に、事務的に日程を消化したいと考え、コピペを行なったのかもしれませんが。」

で、講義の後にこの学生に、「本当にあなたはそれでいいと思っているの?」と私が尋ねたところ、「いえ、私はそうは思いませんが、安倍首相ならそう考えるだろうと思ったのです」と答えた。どうやら、彼の答は私の怒りに気圧されての逃げだったのだろうが、でも、「そうあなたが考えたのはどうしてなのだろうか? どう読んでも、仕方がない(＝認める・受け入れる)としか解釈できないレポートだよ」と伝えた。このレポートおよび私のコメントへのこの学生の反応は、ともに今日の若者の時代迎合＝政治的無関心の発露のひとつである。これについては、中西新太郎「貧困と孤立のスパイラルを断ち切る」(『現代思想』2015年4月号)が次のように説く——「企業社会の秩序にそくして振る舞えるよう求める職業的社会化にあっては、政治的関心を持たずに生きることの『陶冶』が迫られる。政治的関心を持たぬこと(見せぬこと)が、社会生活を大過なく過ごす処世術となる『非政治化の政治』が支配したのである。若者の政治的無関心という『常識』は、政治的社会化のこの特異な様相を若者意識の側に置き換える転倒した認識にすぎない。」

さらには、安倍首相のコピペ問題に関しては、安倍首相批判への反論とでもいえるものがあつた——「安倍総理の挨拶文は、『コピペ』というより『使い回し』と表現すべき事例である。ただ、『コピペ』の方が時流に乗って、よりインパクトがあるから、このような表現になったのであろう。他の総理も同じようなことはしていたかもしれないが、落合[恵子]氏が今回問題視した背景は、挨拶文のあり方より安倍総理の防衛政策にあり、この当否が問題の本質である。」と。

これについては、まず第一に、『コピペ』より『使い回し』と表現すべき」という指摘

が私には納得できない。『コピペ』の方が時流に乗って、よりインパクトがあるから、このような表現になったのであろう」として、安倍首相批判をことばの「時流」のレベルに貶めてしまっているからである。『コピペ』より『使い回し』と表現すべき」と言うことで問題の所在を曖昧にし、そして、大した問題ではないという印象を含ませている。そのことは、レポートが言うところの、「挨拶文のあり方」問題に名を借りて安倍首相の防衛政策を批判しているにすぎないという文章に通じる。「安倍総理の防衛政策……の当否が問題の本質である。」というこのレポートの理解というか反論は、しかしながら、安倍首相の「防衛政策」と「挨拶文のあり方」をそれぞれ別個の問題として捉えていることを問わず語りに示している。じつは両者はけっして別個にあるのではなく、あくまでも一体なのである。いずれも安倍総理の考えから必然的に生じるものなのである。

安倍首相のそれについては、別のレポートもあった――

コピペ問題について……安倍首相のコピペ問題が例で挙げられていたので、私も自分なりに調べてみました。その中で、「東大でもレポートコピペ問題 OB『もっと上手くやれ』」とのニュースを見つけました。あの有名な東京大学の学生でもコピペというようにことをしているということを知り、非常に残念な気持ちになりました。さらに、OBの方の意見で、「ばれないようにすれば良い」といった内容のことが書かれてあるのを見て、批判すべき内容はそこではなく、他にもっと大事なことがあるのでは？ と思いました。

「自分なりに調べ」ということがネットでこうやって簡単にできることに私は驚かされるが、それは今は措いて、この学生が言うように「批判すべき内容はそこではなく、他にもっと大事なことがあるのでは？」という指摘に同意したい。

4. 共感のレポート

私の前稿における、学生たちのコピペ問題の背景にあるのは経済的な貧困問題、そこからの脱出のための余儀ない過重なアルバイト問題であるという指摘には、当事者である学生たちから圧倒的な共感が寄せられた――

今回この論文を読み、大変共感しました。私も現在一人暮らしで、家賃以外はすべて自分のアルバイトで賄っているの、論文に出てくる人たちと状況が似ており、私だけではなかったのかと安心しましたが、同時に寂しい気持ちにもなりました。

私もアルバイトをしなければ生活ができなくなるので、今はある曜日に授業を固めて、週5でアルバイトをしています。それだけ働いても遊びに使えるお金はわずかで、実家がお金持ちでアルバイトもせず悠々と遊んでいる友達を見ていると、何とも言えない気持ちになるものです。おじいちゃんやおばあちゃんからは小学校の頃と同じように「学校は楽しい？」と聞かれたりしますが、正直今の私は学校どころではなく生活をしていく

のに精一杯で、毎日バタバタと過ごして日々が終わっていただけです。その場では「楽しいよ」と言って場を和ますのですが、本心で言ってわけではないので心が痛いです。論文の中の女子高生が言っていた「学生は勉強や学校のこと以外は頑張らなくてもいいのが当たり前な社会」になることを願うばかりです。

私は日本学生支援機構から奨学金を受けている。それは私の学費に回されている。交通費や食費は家から出してもらっているが、余計なお金は受け取っていない。自宅通学なので家賃や生活費は生じないからどうにか過度のアルバイトをせずに暮らしている。

私は〇〇部に所属している。授業の合間に部活の練習があり、土日も基本的に練習がある。授業と部活を両立させ、なおかつアルバイトをしようとする、夜勤のシフトに入らざるをえなくなる。ファミリーレストランで深夜のシフトに入ったり、宅配便の配送センターなどのアルバイトを経験したが、始発を待つためにインターネットカフェで時間を潰したこともかなりの回数に上る。チームメイトには親元を離れ一人暮らしをしている者が多数いる。彼らの多くは学費のみを出してもらい、生活費全てをアルバイトで賄っている。授業、レポート、テスト、部活の練習、遠征、公式戦、アルバイト。試合が終わった後にそのままアルバイトに駆けつける仲間もいる。……「家賃を払うの間に合わない」とか「今月あと1000円しかない」とか「3日間カレーを食べている」という話を聞く。確かに大学生を巡る経済事情はよいとは言えない。

私たち3年生は、いよいよ就職活動が始まる。社会人として働き独り立ちしていく自分の姿は、想像もつかない。先輩諸氏から聞く話では、厳しい状況が語られることもある。なかなか内定がもらえないのは何となく分かるのだが、説明会に行くための交通費（新幹線代や航空機代）を用立てなければならないことや、赴任地への引っ越し代に苦慮する話などには驚いた。就職するにもお金がかかるのだ。

ある居酒屋チェーン店で正社員として働いている人から聞いたことだが、「新規店舗を立ち上げる時は数人の正社員がいるが、軌道に乗れば正社員は店長である自分だけ。仕事の中身は決まっているので、こなせなければ早く行くか遅く帰る、もしくはその両方。売り上げによって雇えるアルバイトの数が決まるので、売り上げが減ると自分の負担が増える」という状況らしい。仕事にはやりがいを感じているが、健康面が気になるそうだ。

私を含めて大学生は、就職したら給料が入るので今よりは忙しくなくなると考えている。しかし、本当にそうだろうか。大学生は使いやすく安い労働力である。では、卒業したらどうなのだろう。先ほどの居酒屋チェーンは労働の多くをアルバイトで賄っている。同じようなことが企業でもあるのではないか。アルバイトや派遣社員を多く雇い、正社員を減らすことで人件費を安くする。そんなことを考えると、まだ始まってもない就職活動に不安を感じてしまう。

論文の中で「学生は勉強や学校のこと以外は頑張らなくてもよいのが当たり前な社会」であるとの女子高生の言葉に考えさせられた。そんなことは考えたこともないが、その

通りである。しかし、周りを見ると自分も含め「勉強や学校のこと以外」に頑張らなければいけない状況が、大学のみならず中学の時ですらあった。家庭の事情でせっかく合格した高校を入学辞退した同級生がいた。人一倍頑張り屋の彼女がどれほど悔しい思いをしたのかは計り知れない。大学まで進めた私は幸運なのだろうか。そんなふうを考えなければならぬ状況がおかしいんだと、今は考えることができる。

「自己責任」「競争社会」も二つはよく聞く言葉である。「アルバイトは勉強に支障のないように自己責任でやりなさい。」勉強に支障が出て生活に支障が出ないようにするアルバイトをせざるを得ない学生が存在する。「競争社会」の中で、そもそも努力するところではないのに努力せざるを得ない学生が存在する。なんとなく肯定的に捉えていた二つの言葉だが、よく考える必要がある。自己責任が大学生にあるから、かえって大学生というものが見えていないことがあるんだと気づいた。あと1年の学生生活、勉強と部活動を頑張ろうと改めて考えた。

池野先生の講義で取り上げられる事例は極端な貧困や極端なケースを抱える人たちに関わるものばかりで、自分とは関係ないことだとばかり思っていたのですが、今回この論文を読んで考えを改めることが出来ました。貧困によるリテラシー獲得の困難性、ブラックバイトの例、奨学金問題、就活など、程度の差こそあれ、多くの若者が同じことで悩み苦しんでいるように思いません。そして、そこに共通して蔓延しているのは、やはり「将来に対する不安や無力感からくる無気力」です。[4]「傷めつけられきっている学生の現在」の1年生のレポートや[5]「競争は文句なしに善だろうか？」の学生のレポートを読んで、私もほぼ同意見でした。それが学校教育によるものなのか、自らの生き方によるものなのかは分かりませんが、自己責任論、競争至上主義の新自由主義の仕組み、考え方は脳だけでなく身体から血液から骨に至るまで深く浸透し、こびりついているように思われます。人を強者と弱者に分けるならば、この考え方は完全に強者の理論です。それが分かっているながらも、強者の理論を下敷きに物事を考えざるを得ないからこそ、現実とのギャップに苦しみ無気力になるのでしょう。しかし、私は世の中がこの強者の理論で回っているとしか思えません。世間一般に広く浸透しているからこそ尚更そこから外れることは出来ないと思います。[5]「競争は文句なしに善だろうか？」の東海林さんと女子高生のエピソードを感動しつつ最後まで読んだのですが、希望や打開策について語られていなかったのでもう一つの社会>を考えるキッカケは生まれませんでした。私には、弱者に甘んじて生きていくことしか思いつきません。

……私の周りには文中の学生のような、私よりももっと大変な学生もいます。国公立に通っている先輩でも、焼肉屋、ホテルのレストランのホール、中国語教室の講師の3つのアルバイトをして、学費を稼いでいます。それでも、自分の口座に振り込まれるお金に手をつけることなく、そのまま学費の引き落としが来るなんてこともあるそうです。給付型の奨学金も借りていますが、それでもこれだけ働いています。ある日、「こんな

に忙しくて何のために大学に行ったのか分からない」と言っていました。私は、掛ける言葉が見つかりませんでした。また、同級生の友人も入学してから学費を払うのが困難な状況になり、奨学金を借りても返済できる見込みがなかったため、所属していた部活動を辞め、朝から晩までアルバイトしていますが、夜勤で疲れ朝早く起きることができなかつたり、授業の時間もアルバイトを入れたりしていて、その結果単位を落とし卒業できるかギリギリの状態だそうです。

このような友人や先輩を見ていると、「本当にここまでして大学に行く意味があるのか」と疑問に思います⁷⁾。よく無利子や給付型の奨学金の条件に「成績が〇〇以上」といったような条件がありますが、このように授業以外や授業の時間まで労働に費やしている学生が十分な成績を取ることができるのでしょうか。奨学金にはたくさんの人が応募すると思うので、そういった点でしか篩に掛けることができないのも分かります。ですが、やっぱり、文中にあった通り日本は努力主義ですから、その苦しい状況を乗り切った悲劇のヒロイン・ヒーローだけにこの奨学金を手にする権利があると言われているような気がしてなりません。諺の「螢雪の功」に沿ったようなストーリーがなければ報われないのでしょうか。コピペしてでもとりあえずレポートを出して単位を修得しなければならない。留年すればより費用が必要になり、またバイトを増やし学習がおろそかになる……負の連鎖でしかありません。そのような状況に追い込まれている学生こそ、努力評価ではなく状況評価で援助をし、コピペではない文章を書く時間を与えてあげるべきではないかと私は思いました。

7) じつは、もっと露骨に、そこまで言うか！ というレポートがあった。私の前掲「学生たちの現在・再論」の「率直な感想として」出されたのだが、それは次のようなものであった——「バイトなしで学生生活が困難なのであれば、高校卒業後すぐに働くべきだと思いました。確かに大卒であれば給料など良くなると思いますが、無理して大学に来る必要はないと思います。」

これをそのまま放置できないと思って、次の講義のあとにこの学生に残ってもらって、私はあなたのこのレポートに到底納得できないのだが、どうしてそう考えるのか、もう少し丁寧に説明してほしい、と頼んだところ、次週にさらに激しいレポートが提出された——

私が、アルバイトをしなければ生活できない学生に、それなら学校を辞めるべきだと論じたのは、そこまでして無理しなくてもいい、と思ったからです。別に、高卒でも就職できますし、なにより入学費、授業料、受験費など大学に関する費用がかかります。なので、少しでもその費用を生活費に充て、心身、肉体的にも楽すべきだ、と思います。また、たくさんバイトをしていて学校に行く根性があるならば、多少ブラックな企業にいても続けていくことができる、と思います。たしかに、大卒というネームバリューは惜しいですが、それでも学校というのは勉強をするところであり、居眠りなどされると周りにも迷惑を賭けてしまうので、潔く高卒を受け入れるべきだ、と思います。また、うちの大学などではゼミなどでグループで行なう授業もあります。もし、自分がそんな人物と一緒にグループになると、絶対に悪意を向ける、と思います。なので、周りに迷惑をかけるのなら、潔く自分から辞めるのが私の考えです。

これについては、機会をあらためて論じることにしたい。

……学校からの奨学金を借りている友達は、将来奨学金を返す時に少しでも楽になるように今からアルバイトの給料を少しずつ貯金している。

……姉がよく自分のアルバイト先の話をしてくれる。話といっても、所謂「ブラックバイト」の相談、愚痴がほとんどである。夕方から明け方まで休憩なしの労働、帰宅するのはほぼ“朝”らしい。そこから大学に行き講義を受け、帰宅して数時間後にはまた明け方までアルバイト。自分で言うのもおかしいが、私の家庭は裕福なほうだと思う。家賃や電気代水道代等は親が払ってくれるし、不定期だが仕送りもある。姉は「お小遣い稼ぎ」程度の気持でアルバイトを始めた。週3~4、数時間ぐらいでいいかな程度に考えていたらしいが、入ってみれば、そのバイト先は正社員もアルバイトも人がギリギリの状態らしく、ほとんど休みがもらえないのだという。なんとか休みを取ることができても、「今日は入れないか」と頻繁に電話がくる。私が姉の元へ遊びに行った日にもかかってきたことがあった。長時間労働で疲労も溜まることだろうし、女子大生を深夜明け方まで頻繁に働かせるのは少し危険なのではと感じる。実際、姉が深夜に帰宅中、不審者に遭遇したことがあったそうだ。辞めたくても「人手が足りない」やら「貴方が一番頼りになる」などと言われてしまい、人が良い姉は今日もそこでアルバイトに勤しんでいることだろう。

……私もアルバイトをしながら大学生活を送っている生徒の1人です。もちろん、現役大学生なので、論文に書いてあるような現状もある程度知っていました。

私は現在週3の学校生活と週5~7程度のアルバイトを両立しています。アルバイトは、昼間は学校があるので、夜のほうが効率が良いと思い、BARで働いていますが、朝方に終わることもあるので、睡眠時間が確保できません。そのまま寝ずに学校へ来ることもあれば、体の疲れに負けてしまい、学校へ遅刻したり休んでしまうこともあります。正直、遊びたい、休みたい気持もありますが、今の生活で最も優先しているのがバイトです。そんな現状に、“私は学生なのに……”と思うことも多々あります。

しかし、こんな現状は私だけではありません。周りにいるほとんどの友達が同じような生活を送り、同じような現状です。

今はどこへアルバイトへ行っても、ほとんどがバイトの人数のほうが多く、中途半端な気持では心が折れてしまいます。それでも、家賃、生活費、家族への負担を考えると、アルバイトを頑張らないと全てが崩れてしまうような気がするのです。きっと、こんな現状でも大学に通えている自分は恵まれているほうだとも思います。

だけど、こんな現状が世の中に続いていけば、ただの悪循環だと思います。現に、奨学金の問題で就職してからも苦しめられている人はいるわけです。健康第一という言葉があるように、心も健康でなければ、世の中は明るくならないと思います。

経済、日本の問題に目を向ける前に、まずはこのような小さな現代の問題に目を向ければ、自然と経済や日本の問題も改善されるのでは、と思います。

……ぼくも友達もみんなアルバイトをしていて、正直、宿題をする暇がない。するとしても深夜だったり、授業中でもする。どちらにせよ、勉強に妨害が出てしまう。とくに授業中にしてしまわないと間に合わないという忙しさの時、全く授業の話が聞けず、疲れも溜まっていきます。アルバイトは時間を消していく……しかしアルバイトをしなければ大学に行けない……このようなことが起きるのに気づきました。先生の論文に、ブラックバイトについて書いてありました。うちの友達にブラックバイトで働いている人がいます。学校終わってすぐバイトに通い、内容はハードでくたくたになり、だいたい夜の12時に終わる。その子は、とにかくつらいつらいと言っています。また、ぼくの働いている場所でも応援ばかりで帰る時間が遅くなる人もいます。こういった妨害で、勉強が出来ない状況になっていることに気づきました。あらためて、大学生って大変だなと感じました。

……日本の奨学金は返さなければならないことに驚いた。就職したら学校でもらった奨学金を返さなければならないこと、若者に大変ストレスをかけてブラック企業に“NO”を言えなくなるんじゃないか、と思う。奨学金は成績優秀な学生へのご褒美。学生たちは奨学金のため、もっと学習意欲を提供していくのは普通と思う。返さなければならない奨学金なら、奨学金とは呼べない。ただの、無利子の借金だ。

最後のレポートは中国からの留学生のものである。さすがに社会主義国——市場経済を導入している現在の中国がはたして社会主義国かどうかという疑念があるが、今はそれを措いて、とにかくにも中国は社会主義を標榜している——だけあって、そこで教育を受けてきたこの学生は「日本の奨学金は返さなければならないことに驚」き、「返さなければならない奨学金なら、奨学金とは呼べない。ただの、無利子の借金だ」と、明確にこの本質を見抜いている。

そして、その三つ前のレポート——確認のために再掲すれば、『お小遣い稼ぎ』程度の気持でアルバイトを始めた」姉だが、実際にバイトに「入ってみれば……ほとんど休みがもらえず、「なんとか休みを取ることができても、『今日はいれないか』と頻繁に電話がくる。……「辞めたくても『人手が足りない』やら『貴方が一番頼りになる』などと言われてしまい、人が良い姉は今日もそこでアルバイトに勤しんでいることだろう。」——は、「私の家庭は裕福なほうだ」という点でいささか異質に思えるが、それでもそのバイト実態はなんら変わらない。いったい、それは何故なのだろうか。これについては、対談・大内裕和×今野晴貴「ブラックバイトから考える教育の現在」(『現代思想』2015年4月号)が次のようにそのポイントを突いている——

……具体的な経験だから、これは役に立つと思ってバイトに走るのですが、そこで学ぶのは、結局曖昧な「社内ルール」で、何かの能力がつくわけでもないのです。身に着くのは、単にブラックなものに対して従順に従ったという経験値だけです。それは……就

職に結びつくかどうか不明です。

貧困化も大事なポイントですが、学生は貧困のためだけにブラックバイトを始めるのではありません。お金に余裕があるのにブラックバイトをしている学生もかなり多くいます。その理由は、いま述べたように経験を求めてしまうこと、これに加えて、働き始めるとやめられないことです。極度に職場組織に組み込まれてしまうので、例えば五万円だけ必要なのに一五万円分稼いでしまうといったことが起こる。職場では、店長がアルバイトを長時間働かせなければ自分の背負うことになってしまうから、必死に組み込むわけです。バイトのほうはそれに順応することが正義だと思ってしまう、どんどんのめり込んでいく。それで必要以上に働かされるわけですね。

そして、どのみち「職場組織に組み込まれてしまう」のならばそのバイトをせめて前向きに捉えて自己正当化したい。そのほうが気が楽になる、という思惑も——おそらく無意識にだろが——生まれる。次のようなレポートは、そうしたものであろう——

……バイトをすることでいくつかのメリットがあると私は考えます。

一つ目はバイトをすることで新たに人とのつながりができることである。これはバイトをしていないとできない経験であり、様々な人の話を聞くと自分にはない考えの人とも出会えるので、自分にとってプラスになる。

二つ目は社会人になる前の準備がそこでできるということ、働いてお金をもらうという経験ができるため働く意味を理解できると感じます。

このようにバイトをすることでこのようなプラスの部分が多いと思うので、学生ならバイトをしないといけないと私は思います。

ところで、つい先日のこと、用事があって近くの郵便局に出かけたおり、さまざまなチラシやパンフが収められている棚のなかに、「子どもには十分な教育を受けさせたい。そのためのご準備を始めませんか？」というチラシが目に入った。学生たちの経済事情について考えていたので一枚を取り出してよく見てみると、合格通知を受けて四人の女子高生に胴上げされているイラストがあり、その横に「おめでとう！ その瞬間に」という文章があり、「受験から入学までの費用（私立（理科系）・自宅外通学の場合）」という小さな字のあとに大きな赤字で「総額 約230万円」と書かれてある。そして、「いつから教育資金を準備し始めますか？」と「株式会社かんぽ生命保険」の宣伝になっているのである。注意すべきは、あくまでもこの金額は入学に当たってのそれではないのである。このあとは——奨学金ということなのであろう。そして、アルバイトが待っている。

もうひとつ。私の住む地域に無料配布されるタウン誌『リビング北摂中央』は地域のいろんな店の宣伝を目的にしたものだが、電力会社後援による原発安全PRをいつもして私には気分が良いものではない。が、いつも手にとって目を通してきたのは「暮らしの設計相談」というコーナーの家計簿診断である。ほぼ一〇〇%の確率で相談者の支出項目

に「保険」があるから、いったいどのくらいの保険料を負担しているのかに興味があったからである。ところで、相談者が、2歳の娘を持つ、28歳の公務員の夫と31歳の非常勤看護師の妻、という最近のそれ（2015年4月11日号）に、なんと支出項目の最後に「奨学金返済 1万3000円」というのがあった。この論文を書いていたから奨学金返済という項目に気づいただけであって、おそらくはもっと以前からあったのかもしれないが。このケースにおいては、夫の公務員の収入は22万円とあり、そのなかからの「奨学金返済 1万3000円」である（それでも負担であろう）が、これが非正規雇用のケースであれば、その負担は決定的となることだろう⁸⁾。

5. 反発・反論のレポート

さて、もちろん、先に紹介した「コピペ」問題への反論と同じように、私のアルバイトに関する論理展開・理解に反発するレポートもけっこうな数があった――

……けど、たくさんバイトをすることにもメリットはある。それはお金を稼ぐ大変さが十分に分かり、両親の大変さや妻さが分かることだ。……アルバイトをする、しないは関係なしに、しっかりと良い成績をとり、4年間で卒業することが大学生の仕事だ。

……部員の中には経済的な理由で部活を退部、休部する部員も稀にいますし、学部の友達の中には家計を支えるために大学を退学し就職する友人もいました。私自身は小学校から大学まで部活に没頭しており、「ブラックバイト」や奨学金については無縁の生活をしてきたので、深くは理解できません。けれども、自分の責任でバイト中心の生活に追い込まれていっている学生が多いのも実情だと思います。節約できることをせず自分の収入に見合っていない遊び、使いもしないものにお金を貯め込むだけのバイトなど、自ら健全な学生生活を放棄しているようにも思います。

……今の学生はここに書かれている通り確かに多忙であり、何か理由があって働いている人がほとんどかもしれない。しかし、私はアパレル、居酒屋、スーパーの3つを掛け持ちして大学も通っているが、バイトに関して「苛酷」だと感じたことはない。それは私の取り巻く環境が裕福だからではない。母子家庭で裕福とは無縁の家庭環境だが、バイトに関して感謝すらしている。自分で選び自分で決めたバイトに「ブラックバイト」など存在するのだろうか。就職とは違い、合わなければ辞めることもできる。いわば選

8) たとえば、野村昌二・竹下郁子「娘が父に綴った16枚の中退決意――いま、そこにある『教育格差』」（『AERA』2015年5月25日号）が紹介する、中部地方の私立大学を卒業した男性（25）のケースがそうである――在学中の4年間に毎月8万円を借りた彼は13年3月に卒業した時点で516万円の借金を背負ったが、「就活に失敗し、中部地方の県庁で1年ごとに契約が更新される非常勤嘱託職員として働く。給与は手取り14万円弱で、賞与もない。年収は200万円を切る。そこから月3万8千円の家賃、食費、光熱費などを引くと手元にはほとんど残らない。」

択肢がある状況で、なぜ学生は苦しめられるのだろうか。働かなければいけないという概念に縛られることが原因なのだろうか。

私は、バイトに関して「学びの場」だと思っている。やりがいを感じて働いているため、「苛酷」だとは感じない。そのやりがいが尽きれば辞めて、新しい環境に身を置いてみればいい。それが1個だろうと、2個だろうと、同じである。自分に合った環境が見つければ「ブラック企業」に遇うこともなく、楽しく働けるのだと思う。最近では時給も良い上に環境も良いバイトが少なからず存在する。そういった場を探さず苦勞しているというのは、どうかと感じる。自分がそこで働くことと決めたにもかかわらず、大学が二の次になるということは、親にも失礼である。自分の体調を管理しつつ、奨学金などでお金を貯め、バイトでは学びながら働くというのは当たり前のように感じるのである。

実際、無理な労働条件でバイトに負荷をかけるところも存在する。しかし、そこで働き続けるかは自分の選択なのである。バイトという環境が社会に出ていく上で必要なものを教えてくれる上に、自分の中でもたくさんの気づきがある。それが理由で働く人もいる以上、バイトに関してどのように捉えるかは自分自身の問題ではないだろうか。それと同時に、もっと自分の取り巻く環境に意識を持つべきだと感じる。受け身の姿勢ではなく、自らが学びに行こうとするべきだ。そういった姿勢が今日の学生には欠けているのかもしれない。

こうした反発は今の時代状況——新自由主義が生み出す自己責任原則の浸透など——からして当然出てくるものだと思っている。だから、これらがどこからどうやって学生たちのなかに生まれるのかを逆にもう一度学生たちに考えてもらうことに繋げていけばより深い理解に行きつけるので、こうした反発をこそ学生たちとの会話のきっかけとして大事にして議論していきたい。

さて、「アルバイトをする、しないは関係なしに、しっかりと良い成績をとり、4年間で卒業することが大学生の仕事だ。」とか、さらには、「自分で選び自分で決めたバイトに『ブラックバイト』など存在するのだろうか。就職とは違い、合わなければ辞めることもできる。いわば選択肢がある状況で、なぜ学生は苦しめられるのだろうか。……私は、バイトに関して『学びの場』だと思っている。やりがいを感じて働いているため、『苛酷』だとは感じない」などというレポートなどは一見説得力をもっているようだが——だからこそ、書いている本人はそう言い切るのである——、まず、「アルバイトをする、しないは関係なしに」といった悠長な事態ではすでにないこと、そして、本当に多くの学生たちにとって「合わなければ辞めることもできる」＝「いわば選択肢がある状況」なのか、と議論しなければならない。そのうえに根源的な問いかけが、いまの教育として必要なのである⁹⁾。

9) これについては、前掲の対談・大内裕和×今野晴貴「ブラックバイトから考える教育の現在」での今野氏の説明が参考になる——「学生にとってはブラックバイトの経験が、就職活動に有利だとまことしやかに言われ、実際にアルバイト就労の動機の大きな部分を『社会経験』が占めています。

さらに、こうしたレポートに対しては、前掲『ブラック企業と奨学金問題』での川村遼平・大内裕和両氏のそれぞれ次のような指摘が参考になるだろう――

関西の大きな不動産会社に就職したある男性は、一週間の研修を受けました。研修期間中の睡眠時間はたったの六時間、しかもこの六時間は、こっそり隠れて眠った時間なのです。研修に関するしおりを見せてもらったのですが、どこにも「就寝」という文字がないのです。絶えず何かをしているのです。一日のプログラムが終わって、夜中、眠らず何をしているかという、翌日に五分間のスピーチというものが課せられていて、スピーチの原稿を考えてそれを暗記しているわけです。その男性は、最初はくだらないと考えて、あまり真面目にやっていなかったのですが、そういう人に対しては、おそろしいことに、同僚に批判をさせるのです。「君はまだ全然本気じゃないじゃないか」というようなことを言わせるわけです。「夜中、談話室で見かけなかったけど、こっそり寝てたんじゃないのか」と詰め寄られることとなります。こういうことが続くと、もう眠ることができなくなるのです。それから、「君は何のために会社に入ったんだ、本気で会社のためにやる気があるのか」と延々と言われ続け……最終的に、男性のほうはどうなったかという、あるとき、しおりに「おれは変わる」と書き込んで、実際、ほんとうに変わったらしいのです。本気でこの会社のためにやっ払いこう、と思ったのです。いままでおかしいと思っていたことが、これは正しいんだ、と考えたら、ふっと気が楽になったと言うのです。研修終了後も、研修中のペースですずっと働いていったのですが、ある日、書類の上にこぼした夜食のおでんのスープを拭いているときに、「おれはいつたい何をしてるんだ」と我に返ったように考えたのです。 pp. 29～30

川村さんは、ブラック企業に入ると研修で洗脳されるという話をされましたが、私の教えている学生を見ると、もう在学中から洗脳されているのです。私が「有給休暇は取れるんだよ」と言うと、学生は「有給休暇なんて都市伝説ですよ」と言います。……苛酷な労働ですが、学生はブラックバイトを通して、「過酷な」働き方なんてない、それが「ふつうの」働き方なのだと言っているのです。……在学中から戦いを作らないと、働き方がおかしいということすらわからないし、まあ、そんなもんだ、といった感じでブラック企業に入ってしまうだろう…… pp. 51～52

……これが社会経験だと思って耐える。この行為は、単に従属している、会社の『社内ルール』に従うということだけを意味しているではありません。／重要なことは、学生たちにとって、ブラックバイト（社会経験）への参入は、ある種の向上心を担保としている点です。正社員を目指し、社会人として力を身に付けていく、そのためにはこういうバイト先で言われていることができなきゃいけないんだ。それができてはじめて、就職も何とかなるし、なった後もバイトで学んだことを生かして、それは要するに『社内ルール』に従順になるということなのですけれど、それをもっとできるようになってはじめて一人前、ちゃんとした社員になれるのだと思われている。

それにしても、レポートにあるように、「自己責任論，競争至上主義の新自由主義の仕組み，考え方は脳だけでなく身体から血液から骨に至るまで深く浸透し，こびりついている」・「この考え方は完全に強者の理論です。それが分かっているながらも，強者の理論を下敷きに物事を考えざるを得ないからこそ，現実とのギャップに苦しみ無気力になるのでしょう。しかし，私は世の中がこの強者の理論で回っているとしか思えません。世間一般に広く浸透しているからこそ尚更そこから外れることは出来ないと思います。……私には，弱者に甘んじて生きていくことしか思いつきません」と眩く学生との対話がどう可能なのかを私はいま突きつけられている。

それでも，先に示したレポートにあるように，『自己責任』『競争社会』も二つはよく聞く言葉である。『アルバイトは勉学に支障のないように自己責任でやりなさい。』勉学に支障が出て生活に支障が出ないようにするアルバイトせざるを得ない学生が存在する。『競争社会』の中で，そもそも努力するところではないのに努力せざるを得ない学生が存在する。なんとなく肯定的に捉えていた二つの言葉だが，よく考える必要がある。自己責任が大学生にあるから，かえって大学生というものが見えていないことがあるんだと気づいた」と分かってもらえることもあるのだから，私は私の実践に確信を持つことができるのである。

以下，次号に続く